

イランの「差し迫った脅威」めぐり米 CIA 長官らが議会証言、 トランプ大統領の見解と矛盾

2026.03.19 Thu posted at 11:14 JST



FBI のパテル長官やギャバード国家情報長官、CIA のラトクリフ長官らが上院の公聴会に出席した/Jonathan Ernst/Reuters

(CNN) 米上院情報委員会で 18 日、イランとの戦争に関する公聴会が開かれ、米情報機関のトップらが証言に立った。3 週間前に始まった戦争について公聴会が開かれるのは初めて。

この日は国家情報長官のトゥルシ・ギャバード氏、中央情報局 (CIA) 長官のジョン・ラトクリフ氏、連邦捜査局 (FBI) 長官のカシュ・パテル氏が証言。トランプ大統領や政権側のこれまでの見解と矛盾する発言が相次ぎ、大統領らの見解を裏付ける根拠も提示できなかった。

この前日には国家テロ対策センターのトップだったジョー・ケント氏が戦争に反対して辞任を表明。「イランは差し迫った脅威ではなかった」との認識を示していた。

18 日の公聴会で最大の焦点は、イラン戦争に関する政権側の疑わしい主張に対する各氏の見解だった。各氏ともそうした情報を目にする立場にあり、証言に偽りがあれば偽証罪に問われる。

イランの核開発計画をめぐっては、米国が昨年 6 月にイランの核施設を攻撃していたが、トランプ大統領は「(イランがその後) 核開発の再建を試みた」と主張。ホワイトハウスはイランによる「差し迫った核の脅威」があると述べていた。

しかしギャバード国家情報長官の見解は違った。

「(6 月の) ミッドナイト・ハンマー (真夜中の鉄槌<てっつい>) 作戦の結果、イランの核濃縮計画は壊滅した」「以来、彼らが濃縮能力を再建しようとする取り組みは一切ない」

ギャバード氏が冒頭のこの証言を、事前に用意した原稿を読み上げずに行ったことは注目に値する。

同氏はさらに、情報機関のこの評価が現在も変わっていないことを明らかにした。

(中略)

戦争を正当化する根拠とされたイランの「差し迫った」脅威については、ギャバード長官は慎重に言葉を選んで自らの判断は示さず、「差し迫った」脅威かどうかはトランプ大統領が判断することだとの認識を示した。

しかし国家情報長官が自らの判断、あるいは情報機関の判断として、「差し迫った」脅威と断言しなかったこと自体、特筆に値する。

(後略)

